

長岡京跡発掘調査概報

昭和57年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

京都市域には、平安京跡をはじめ、過去数千年に至る間の各時代の遺跡が各所に存在し、周知の埋蔵文化財包蔵地の総面積は、およそ5,000ヘクタールにも及んでいます。

古都といわれてきた京都も現代都市へと変容しつつあり、市内のいたるところで、かつての木造家屋群は、ビルへと変わり続けています。また、土木工事等による発掘件数が年とともに増加の傾向を示しているということは、一方では新たな事実の解明が進むことではありますが、また一方では、それに伴って遺跡が消滅するということにもなります。

このような状況の中で、本市といたしましても、市民や工事関係者の方々などの格別の御協力をいただきながら、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、直接保存し難い遺跡については、その状態をできる限り後世に伝えられるように努めてまいりました。

この発掘調査概報は、昭和57年度国庫補助事業として実施した発掘調査の結果をまとめたもので、これが今後ながく活用されるよう念願しています。

おわりに、調査に当たって御協力、御援助をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさま方に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

京都市文化観光局

凡 例

- 1 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した文化庁国庫補助を伴う昭和57年度の長岡京跡の発掘調査概要報告である。
- 2 調査箇所は下記の通りである。
長岡京左京四条三坊・四坊／京都市伏見区夔川町49番地
- 3 本書の執筆は平田泰がおこなった。
- 4 報告書作製にあたって、下記の諸氏の参加を得た。端大志、真喜志悦子、吉本健吾。
- 5 本書で使用した遺構の番号は、本書に限って一連のものであり、遺構番号の前にはS A：築地・柵、S B：建物、S D：溝、S K：土壇、S P：柱穴の分類記号を表示した。
- 6 図中に使用した方位と座標は、国土地理院の平面直角座標系Ⅵにより、標高は京都市水準点(T.P.)によった。
- 7 本書に使用した地図は、京都市発行の10,000分の1地形図を調整したものである。

目 次

第1章 調査経過	1	第3章 遺物	10
1 調査に至る経緯	1	1 遺物の概要	10
2 調査の概要	5	2 古墳時代以前の遺物	10
第2章 遺跡	6	3 長岡京期の遺物	12
1 遺跡の層序	6	第4章 まとめ	16
2 遺構の概要	6		
3 古墳時代の遺構	7		
4 長岡京期の遺構	8		

挿 図 目 次

図1 調査地付近航空写真	1
図2 調査位置図	2
図3 調査地周辺図	4
図4 調査風景	5
図5 S D40実測図	7
図6 S K28実測図	8
図7 S D63出土高杯	10
図8 S D64出土遺物	11
図9 S D63出土石ヒ(S=1/2)	12
図10 長岡京期の出土遺物	13
図11 S D36出土銭貨(S=1/1)	14

表 目 次

表 1	研究所既調査一覧表(長岡京跡に限る).....	3
表 2	出土遺物の総量と百分比.....	15
表 3	出土土器遺構別一覧表.....	17

図 版 目 次

写真図版 1	1. 調査前全景(東から) 2. 調査前全景(西南から)
写真図版 2	1. 1区長岡京期全景(南から) 2. SX64(南から)
写真図版 3	2区長岡京期全景(東から)
写真図版 4	1. SD27・SA25・SB33(南から) 2. SD63(南から)
写真図版 5	1. SD40内杭検出状況(南から) 2. SD67・SD67B(北から)
写真図版 6	1. SD27堆積状況(北から) 2. SD63堆積状況(北から)
写真図版 7	1. SD36堆積状況(北から) 2. SD36銭貨出土状況(西から) 3. SD64遺物出土状況(東から)
写真図版 8	古墳時代出土遺物
写真図版 9	1. 古墳時代出土遺物 2. 長岡京期出土遺物
写真図版 10	長岡京期及び縄文時代出土遺物
図版 1	長岡京期 1区実測図
図版 2	1. 長岡京期 2区実測図 2. 古墳時代 2区実測図
図版 3	調査区土層堆積図

第1章 調査経過

1 調査に至る経緯

調査地は、東南に伸びた向日町丘陵の南端で、東海道新幹線と名神高速道路の交叉する東側にあたり、菱川町集落の東端に接する水田の一面にある。敷地面積は約1,700㎡の広さを有している。この敷地に約1mの盛土を行ない、十数棟の木造住宅を建設する計画の申請があった。木造住宅では、基礎工事が比較的浅い掘削にとどまるため、遺跡の破壊される恐れは少ない。しかし、調査地南端に上記住宅に伴なう幅6mの道路が併設され、側溝部分の掘削工事が行なわれること、将来の各戸の浄化槽設置工事による掘削などで、遺跡の破壊も皆無ではないことが懸念されるに至った。

一方、調査地周辺における埋蔵文化財の調査は、京都市域に限っても30次に及び、重要な成果を挙げるに至っている。特に、本調査地の東隣にある神川小・中学校敷地内の調査(調査位置1)、南側の外環状線街路新設に伴う調査(調査位置12)、日本専売公社工場内



図1 調査地付近航空写真

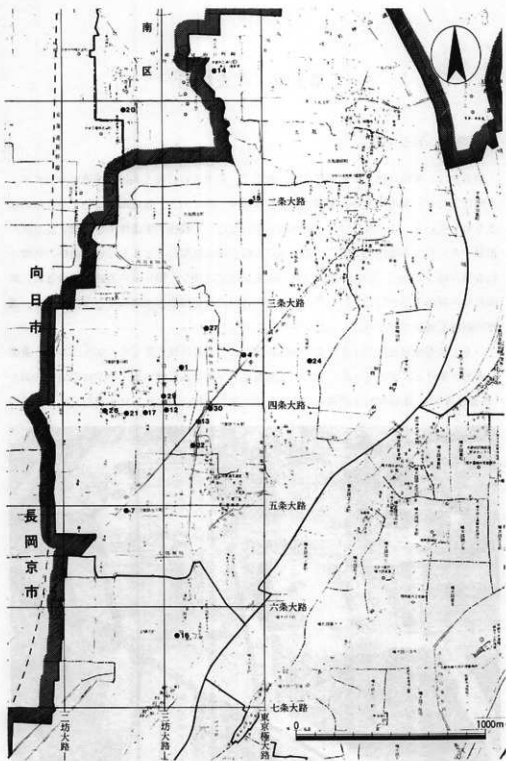


图2 調査位置図

表1 研究所既調査一覧表(長岡京跡に限る)

(昭和58年3月現在)

調査位置	契約番号	調査方法	調査年月日(期別)	調査地点(京都府)	調査面積	調査地	調査成果	文献(昭和)
1	51-17	発掘	51.12.4-52.4.23	伏・御霊跡(豊町町) 御霊跡小・神岡中学校	7200㎡	西条四坊	長岡京第三大内閣跡、 六角小御殿跡、礎物、礎	53年度「長岡京跡発掘調査報告」 「京都市埋蔵文化財研究所調査報告書」
2	51-37	立会	52.1.10-52.9.30	伏・御霊跡(豊町町、久我島の御所)		西条三坊		
3	53-33	*	*	*				
4	53-93	発掘	54.4.9-54.4.18	伏・久我島の御所15-25	380㎡	西条四坊		
5	54-38	立会	54.9.1-54.11.1	伏・御霊跡(豊町町49-49)		五条三坊		
6	54-50	*	55.1.8-55.1.31	*				
7	54-45	発掘	54.10.8-54.12.8	伏・御霊跡(吉町町396、397) 上下水道	1050㎡	六条三坊	長岡京御所跡、奈良時代河内	
8	54-64	立会	55.1.16-55.2.25	礎・久我島土庫跡(上久我池内)				
9	54-69	発掘-立会	55.2.11-55.2.15	伏・成徳寺町、水邊町、天下津町跡	26㎡	五条三坊	奈良時代土壇	54・55年度「京都府埋蔵文化財研究所調査報告書」 併せて発掘調査報告書
10	55-1	発掘	55.4.1-55.6.30	礎・久我島土庫跡(久我島上久我町)	350㎡	二条三坊	長岡京御所跡、奈良時代河内	同上
11	55-2	発掘	*	*				同上
12	55-20	立会	55.8.4-56.2.3	伏・御霊跡(豊町町1)・町東部	1825㎡	五条三、四坊	長岡京御所跡、第三持大内閣跡、井戸、 土壇、築土・古墳時代遺、土壇	55年度「長岡京跡(御霊跡)1号大跡第3号跡第4号外周境 調査報告書」併せて埋蔵文化財研究所調査報告書
13	55-71	*	55.9.12-55.11.11	伏・御霊跡(豊町町河内橋)	303㎡	五条四坊	長岡京御所跡、奈良時代御所跡	55年度「長岡京跡御所跡(河内橋)跡調査報告書」 併せて埋蔵文化財研究所調査報告書
14	55-76	*	55.11.9-55.12.23	伏・久我島町11-25跡14	520㎡	二条四坊	古墳時代遺、井戸	
15	55-81	試掘	55.11.10-55.12.28	伏・久我島の御所13-9跡	645㎡	二条 三条四坊	長岡京御所跡、奈良時代築土、井戸、土壇 古墳時代遺	
16	55-82	*	55.11.14-55.11.16	伏・成徳寺町139-1区	7995㎡	七条三坊		
17	55-87	発掘	55.11.11-55.1.29	伏・御霊跡(豊町町4)・町	530㎡	五条三坊	長岡京御所跡、礎、井戸、溝 古墳時代土壇	55年度「長岡京跡(河内橋)跡調査報告書」併せて埋蔵文化財研究所調査報告書
18	55-88	立会	55.12.18-55.12.14	伏・成徳寺町	20㎡	八条四坊		
19	55-91	発掘-立会	56.1.14-56.5.31	伏・御霊跡(豊町町、吉町町、久我島の御所)	170㎡	西条四坊	長岡京御所跡、古墳時代河内	
20	55-15-2	発掘	56.12.23-56.1.19	礎・久我島土庫跡19(1、192-1)	76㎡	二条三坊	神綱不明近衛大内閣跡	55年度「長岡京跡発掘調査報告書」
21	56-25	*	56.7.11-56.12.28	伏・御霊跡(吉町町、豊町町)	2382㎡	五条三坊	長岡京御所跡、礎、溝、井戸、土壇、古墳時代 木簡、瓦跡、竪穴住居、溝	
22	56-69	発掘-立会	56.10.26-56.12.17	伏・御霊跡(豊町町)	502㎡	五条四坊	古墳時代河内	
23	57-2	立会						
24	57-3	発掘	57.4.15-57.9.30	伏・久我島跡4-10外	4476㎡			
25	57-37	立会	57.7.10-					調査中
26	57-16	発掘	57.9.-	伏・御霊跡(豊町町)		五条三坊		調査中
27	57-21	*	57.9.20-58.1.5	伏・御霊跡(豊町町、御霊跡河内橋)	1007.6㎡	三条四坊 四條四坊	長岡京第三大内閣、二条御所三小内閣	
28	57-42	立会	57.9.26-					調査中
29	57-9-1	発掘	58.1.20-58.2.23	伏・御霊跡(豊町町)	480㎡	四條三、四坊		本調査
30	*	*	58.2.7-58.3.25	伏・御霊跡(老木町)	30㎡	五条四坊		

(注2)

の調査などでは、それぞれ古墳時代の溝、竪穴住居、水田、土壇、長岡京期の道路側溝、建物、井戸、土壇が検出され、これに伴う遺物も大量に出土している。

このことは、本調査地も同様な条件下にあり、遺構・遺物の検出される蓋然性が極めて高く、調査の必要な地点であることが認められた。

この結果、京都市埋蔵文化財調査センターは、原因者との協議を経て、財団法人京都市

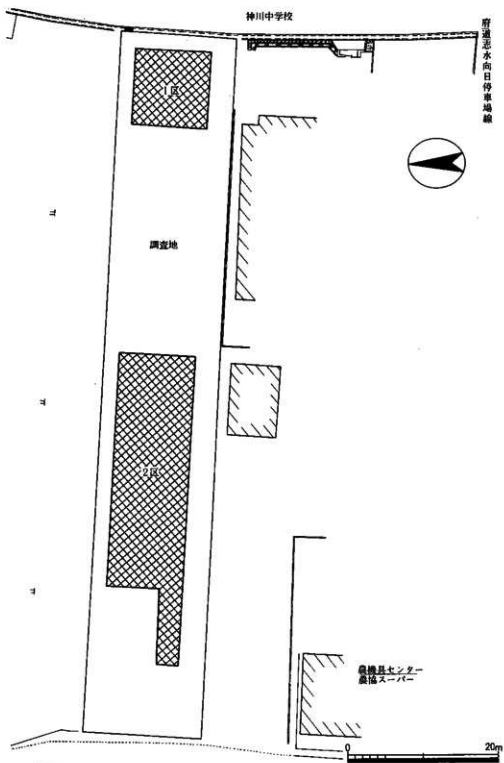


図3 調査地周辺図

埋蔵文化財研究所に調査を委託し、当研究所が、昭和58年2月20日から3月23日にかけて発掘調査を実施した。

2 調査の概要

調査区の設定に際しては、調査地中央南北方向に東三坊大路が、調査地東端に古墳時代溝の検出が想定された^(注3)。このため東端に東西10m、南北10m約100㎡の調査区を、中央部に東西32m、南北10m約350㎡の調査区を設定した。調査面積は、調査時の排土搬出が困難であること、調査日数が少ないこと、未調査地区は将来の調査に委ねられることなどから、約450㎡とした。

調査は、土層の堆積状況と遺構面確認の目安を得ることなどを目的に、調査地内数ヶ所に試掘を実施することから開始した。このあと耕作土、その他の表土層を機械力によって排土する作業を行なった。調査区の呼称は、機械掘削終了順に東端の調査区を1区、西側の調査区を2区とした。

調査の結果、当初の予想通り古墳時代と長岡京期の遺構・遺物を検出した。1区では、古墳時代の溝^(注5)、長岡京期の溝4列、その他の柱穴がある。2区でも同じく古墳時代の溝4条、長岡京期の溝3条、建物1棟、溝2列、土壇1基などがある。長岡京期の溝3条のうち2条は、東三坊大路東西面割溝と考えられるものである。

出土遺物は、1区、2区の古墳時代溝から前期の一括遺物が出土した。長岡京期の遺物は、量的に少なくまとまりに欠けた。特記すべき遺物としては、1区溝下層から出土した縄文時代の石ヒと、2区東三坊大路西側溝から出土した万年通宝が挙げられよう。



図4 調査風景

第2章 遺 跡

1 遺跡の層序

地表は水田の耕作土で、調査地全域ではほぼ水平面を保つ。海拔高は11.30 mを測る。1区、2区ともに耕土(第1層)、床土(第2層)と堆積し、それぞれ15cm、20cmの層厚を持つ。第1層は灰色シルト、第2層は灰オリーブ色シルトである。その下の第3層上層は、西側で明オリーブ灰色シルト、東側が浅黄色微砂及び粗砂などで、下層は明青灰色粘土である。西から東へ順に堆積している。2区長岡京期の遺構は、やや不明瞭ながら第3層下層から一部が検出されるが、確実な検出面としては第4層上面である。

第4層は、西側で約30cmの層厚を持つ灰オリーブ色粘土であるが、Y254付近を境に青灰色細砂が現われ、東側での約20cmの厚さを持つ灰色粘土を覆うに至る。上端はほぼ海拔10.30 mにそろう。古墳時代前期の溝(S D 63)は、その上層に第4層下層である灰色粘土層の流入が見られ、また後期の溝(S D 40)上層に堆積する青灰色細砂は第4層上層に近似する。このことから、第4層は古墳時代前期から後期にかけて堆積したと考えられる。

第5層は緑灰色粘土で、西から東へゆるやかに堆積する極めて安定した土層である。遺物は出土しない。

一方1区では、第4層下に灰オリーブ色微砂が40cmの厚さで堆積し、その下に溝(S D 64)の上層である灰色粘土や、溝の機能停止直前の小細流の堆積などが見られる。S D 64は、灰色粘土、青灰色粘土を主体に堆積し、海拔8 m前後で遺物、流木の大量に出土する面が検出される。これはオリーブ色細砂と粘土から成る。以下1 mの粗砂と細砂の堆積を経て、溝の底面と考えられる淡灰色微砂が海拔7.30 mで現われる。

1区での長岡京期の遺構は、灰オリーブ色微砂を成立面としている。しかし第3層下層で一部の遺構が検出されるのは2区と同様である。

2 遺構の概要

古墳時代の遺構には、調査区全域(1区)が遺構の中と考えられる溝(S D 64)、後期の溝(S D 40)とこれに切られた前期の溝(S D 63)がある。その他、層位的には古墳時代以前と考えられる溝3条(S D 65、S D 67、S D 67B)を検出したが、遺物は出土して

いない。

長岡京期の遺構は、東三坊大路東西両側溝の推定位置に合致する溝2条(SD27、SD36)とこれに伴う櫓2列(SA25、SA37)、建物1棟(SB33)、土壇1基(SK28)、4期にわたって建て替えられたと考えられる櫓4列(SA41、SA45、SA39、SA50)がある。その他、溝1条(SD29)不明柱穴7孔などがある。

3 古墳時代の遺構

SD64 1区で検出した溝で、調査区全域が堆積層の中である。溝の深さは、底部と考えられる淡灰色泥砂層上面で7.3mを測り、長岡京期の遺構面より2.8mほど下る。堆積は上層に緑灰色細砂、中層に青灰色シルト及び緑灰色粘土、下層が灰オリブ細砂と粗砂などである。遺物は土師器壺、甕、高杯、器台、鉢、木製品、植物遺体が中層と下層の境

付近から多量に出土した。下層からは少量の弥生土器と縄文時代の石ビ1点が出土している。

SD40 2区東端を西北から東南方向に流れた溝で、幅は北側で1.8m、南端で2.2mを測る。深さは約50cmである。堆積はレンズ状を呈し、上、中層ともに青灰色を呈する粗砂、細砂、微砂層が見られる。下層中央部には厚さ10cmの灰色粘土が半月状に堆積する。その他溝中央底部に3本の杭が検出され、堰に利

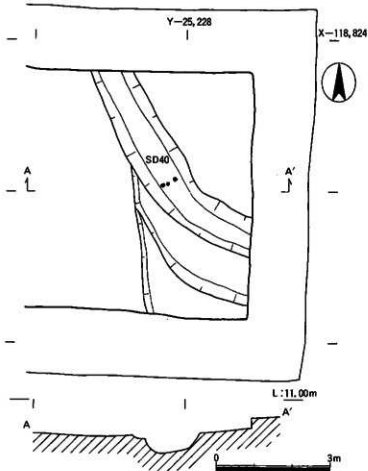


図5 SD40実測図

用されたものであろうか。

下層溝であるSD63を切ること、長岡京期のSD27、SK28に切られていることなどから、古墳時代後半に盛期を迎え、長岡京期までには機能を停止したと考えられる。

SD63 同じく2区東端を南北方向に流れた溝である。東肩は調査区外のため正確な溝幅は明らかではない。しかし南端で東側底部がやや上昇し始めており、これから復元すると、東西幅は約2.5m程度と考えられよう。溝の断面形状は、底部を丸くしたV字形を呈する。溝北端に枕が検出されたこと、断面形状が整っていることなどから、人工的に掘られた溝の可能性がある。遺物は底部中央に集中し、土師器壺、甕、高杯、器台、鉢などの小片が大量に出土した。時期的には、古墳時代前期の遺物を伴うこと、SD40に切られることなどから、古墳時代前期を盛期とし、後期には既に機能の大半を停止したことが考えられる。

SD65 2区拡張区西端に検出された、西北から東南方向へ流れた溝である。幅は90cm、深さは40cmを測る。断面の形状は半円を呈する。南端東肩がやや肩崩れを起し不整である。長岡京期の遺構成立面である第5層を排土した後に検出したため、古墳時代を下ることはない。

SD67 2区中央部で第5層排土後に検出した。ほぼ南北方向に流れた溝である。幅は2.5m、深さは30cmである。埋土である灰白色シルト層の土層で弥生土器片を検出した。

SD67B 2区中央部で検出した。東北から西南の方向へ流れた溝である。断面の形状はゆるやかなV字形を呈する。堆積は上層が青灰色粘土、下層が浅黄色シルトである。SD67を切る。

4. 長岡京期の遺構

SK28 2区西側で検出した東西2m、南北4m以上、深さ10cmを測る不定形の土壇である。SD27の西肩を覆う。堆積が極めて浅く、出土遺物もSD27と差が認められないことから、SD27の機能停止直後の窪地へ遺物が溜ったものであろう。

SD27 2区西端で検出した南北溝で、幅は南端で1.4m、中央部で1.2mを測り、深さは

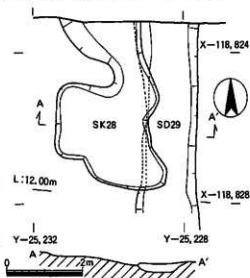


図6 SK28実測図

は35cmである。堆積はレンズ状を呈し、上層が灰白色細砂、下層が青灰色微砂及びシルトから成る。S B 28、S D 29に切られる。

主な出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、木製品、木片などで、時期的には長岡京期のものである。

S D 29 2区西端中央部で検出されて東西溝で、幅50cm、深さ5cmを測る。2区東壁下で北方向に屈曲する。出土遺物は土師器、須恵器などで、長岡京期の土器である。

S D 36 2区西側に検出した南北溝で、溝幅は北側1.1m、南側で1m、深さ20mを測る。埋土は青灰色粘土及びシルトでレンズ状の堆積を見せる。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、銭貨などがある。

S B 33 2区東端、S D 27の東側1.5mの位置で桁行3間、梁間1間分を検出した。桁行柱間は2.1m、梁間は2.7mを測る。柱穴埋土は青灰色砂及びシルトから成る。

S A 15 同じく2区東端、S D 27東側から50~70cm東で検出された、南北方向の櫓列である。柱間は不統一で、4間分を確認した。北からそれぞれ2.1m、2.75m、1.25m、1.6mである。柱穴の埋土は青灰色砂あるいはシルトである。

S A 41 1区中央に検出した西北に伸びる櫓列で4間分を検出した。柱穴掘形は円形に近いものが多い。柱間はほぼ2.1mを測る。

S A 45 同じく1区中央で検出した南北方向の櫓列である。S A 41の東隣に検出し、これに切られる。4間分の検出を見た。柱間は2.1mを測る。

S A 39 1区中央部に、S A 50を切って成立する南北方向の櫓列である。S A 50とはほぼ同一列にある。柱間は2.8~3.3mで不統一である。

S A 50 S A 45、S A 39に切られる南北櫓列で、四列のうち最古と考えられる。柱穴掘形は隅丸方形を呈する。5間分を検出した。柱間は2.1mを測る。

S A 37 2区西端拡張地区で検出して東西方向と考えられる櫓で、柱間寸法は4mを測る。最西端で検出して柱穴掘形内に礎を持つ。

第3章 遺物

1 遺物の概要

本調査で出土した遺物はコンテナ8箱を数える。このうち7箱が土器及び瓦で、他の1箱は木製品、金属製品、石製品などであった。

土器には弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器がある。木製品には枕、曲物底板、もえさし、用途不明加工木などがある。石製品と金属製品には、石ヒ、銭貨、釘、その他がある。

出土遺物を時期的に見れば、古墳時代前期と長岡京期に大半が集中する。古墳時代前期の遺物はS D63、S D64から比較的まとまって出土した。長岡京期では、S K28から一括遺物が出土した他は、各遺構ともに量が少ない。

以下、古墳時代の遺物では、S D63、S D64出土の遺物の説明を行ない、長岡京期では各遺構毎ではなく、器種別に説明を加える。表2は、出土遺物の総量と器種・器形別分布を数量で表示するため作製した。

2 古墳時代以前の遺物

S D63出土遺物(図7) S D63から出土した遺物には、土師器甕、壺、高杯、器台、甑、木製品、植物種子などがある。

土師器甕は、口縁端部をつまみ上げるもの(甕A1)と内側へ肥厚するもの(甕A2)の2種類がある。いずれも体部内面をケズる。壺は平底の底部を持ち、体部下半をハケに

よって調整するものがある。^(注6) 壺は外上方に開く口頸部を有し、口縁端部をわずかに内湾させる。口頸部内面は横方向にミガク。底部は丸底^(注7)であろう。高杯(12)は、杯部が斜め上方へ直線的に立上り、内外面を放射状にミガク。脚部、裾部にも入念なミガキを施す。脚部内面はケズる。透しは円孔で三方に配する。器台は杯部が出土し、^(注8)内面を放射状にミガク。色調は淡赤色を呈する。他に甑と考えられる平底の底部に焼成以前の小円

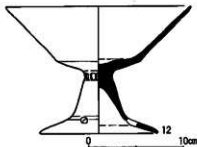


図7 S D63出土高杯

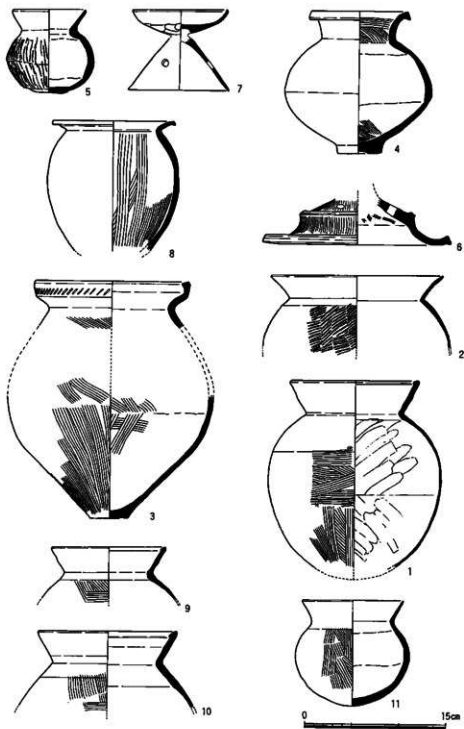


图8 S D 64出土遗物

孔を穿ったものがある。体部下半はハケによる調整を施す。^(注9)

木製品は、枕先と考えられるもので、直径5cmの丸木材に鋭利な面取りを施してある。^(注10)

SD64出土遺物(図8) SX64からは土師器甕、壺、高杯、器台、木製品、石製品、自然流木などが出土した。

土師器甕は、丸底で器壁の薄いもの(甕A)平底で受口状の口縁を持ちやや器壁の厚いもの(甕B)、「く」の文状口縁で肩部の張るもの(甕C)の3種類が出土している。甕Aのうち(2)は茶褐色を呈し、口頸部、体部共に器壁は薄い。体部内面をケズリ、外面は頸部下端まで細かいタタキによる整形を施す。口縁はやや外反気味である。(1)は、口頸部の器壁はやや厚く、端部は内側へ肥厚する。体部内面はケズリ、体部外面上部はナデ、中位以下をハケによる調整を行なう。体部の器壁は極めて薄い。色調は黄灰色を呈する。甕B(3)はやや大型であるが、小型のものもある。^(注11)受口状の口縁を持ち、外面に施文を行なう。体部内面をハケによって調整を行なう。平底の底部を持つ。甕C(8)は「く」の字状の口縁を持ち、端部は外側へ肥厚する。焼成は極めて良好で、断面は黒色化する。底部の形態は不明である。

壺はその形状から3種類に分けられる。壺A(5)は、体部がほぼ球形で斜め上方に直線的に伸びる口頸部を持つ小型のもの、壺B(4)は平底で球形の体部を有し、「く」の字状に外反した口頸部を持ち端部が垂下するもの、壺Cは口頸部は外反し、上下に肥厚した口縁端部を持ち、^(注12)刻文や円形浮文を施すものである。

高杯も2種類が認められる。高杯A(6)は段のある裾部を持ち、裾部によく似た杯部を持つものである。高杯Bは杯部が直線的に斜め上方に伸び筒状の脚部と大きく外側に開く裾部を持ち、^(注13)脚部と裾部が明瞭に分かれる。

器台(7)は、内湾気味に立上る杯部と直線的に外下方へ開く脚部を持つ。脚部には透しを三方に配する。

石ヒ(図9)は入念な調整を行ない形を整えたもので、材質はサヌカイトである。高さ4cm、幅5.3cm、厚さ0.8cmを測る。^(注14)

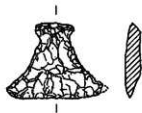


図9 SD64出土石ヒ(S=1/2)

その他、加工痕のある用途不明の木片と自然流木が出土した。

3 長岡京期の遺物

土師器(図10) 土師器には椀、杯、皿、甕、鉢、蓋、壺、高杯がある。椀は口径13cm前

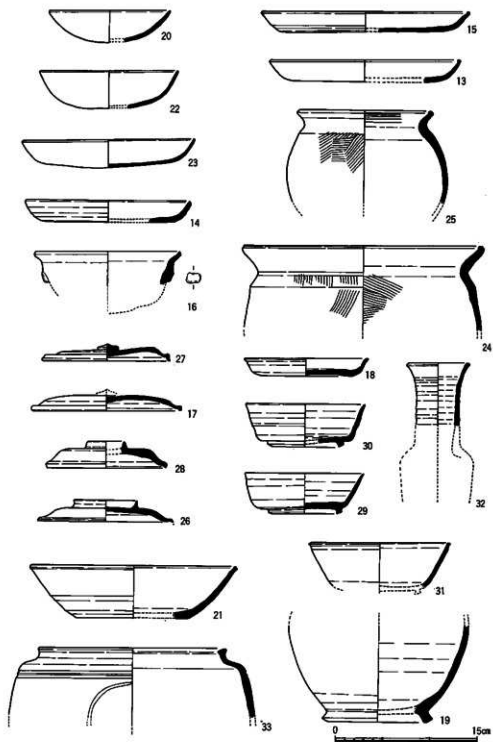


図10 長岡京期の出土遺物

後、器高3.5cm前後のもの(20)と口径15cm前後、器高4cm前後のもの(22)がある。いづれも体部外面をケズる。杯は口径14.2cm、器高3.2cmのもので、ナデによる調整を行なったものである。^(注15)皿は調整手法から2種類に分けられる。皿A(13・15・23)は体部・底部の外面をケズるもので、口径20cm前後のもの15cm前後のものが認められる。皿B(14)はナデのみで調整を行なうものである。両種の皿ともに体部、底部外面に煤の付着したものが多^(注16)い。甕は口径14.5cm(25)、18.9cm、25cm(24)の3種類が出土している。鉢(16)は器高10cm前後で、両側方に退化した把手をつける。その他、壺、宝珠形つまみを持った蓋、脚部に丁寧な面取りを施した高杯があるが、いづれも小破片である。

須恵器(図10) 須恵器には、蓋、皿、杯、鉢、壺、平瓶がある。蓋は、宝珠形つまみのつくもの(17、27)と輪状つまみを持つもの(26、28)の2種類が認められる。皿(18)は、口径13.3cm、器高1.3cmのものが1点出土した。杯は短い逆台形の高台を持ち、口径12.5cm前後、器高4.5cm前後のもの(29、30)と、口径15.4cm、器高5.5cmのもの(31)がある。鉢(21)は、口径22cm、器高5.6cmを測り、高台を持たない。体部下半と底部をケズる。壺は形態から2種類に分けられる。

壺A(32)は口頸部が長く伸び、口縁端部が外反するもので、壺B(19)は断面が四角形で外方へ踏ん張る高台を持ち、腹部が大きく張るタイプのものである。その他、平瓶の体部の小破片が1点出土している。

緑釉陶器(図10) 緑釉陶器は火舎(33)の破片が出土した。口径は約20cmを測り、肩部には2条の凹線を入れる。内面には施釉を行なわない。

その他 金属製品には銭貨、釘などがある。銭貨(図11)は萬年通宝で、表面の宝、通の間に鬆を生じ、裏面は横方向の范ずれが認められる。径2.5cm、厚さ2mmを測る。

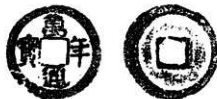


図11 S D 36出土銭貨 (S=1/1)

表2 出土遺物の総破片数と百分比

器種	遺構		S D-27		S K-28		S D-36		S D-63		S D-64	
	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%
弥生土器	38	1.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師器	2096	84.4	32	58.2	287	88.3	7	24.8	585	99.2	337	99.7
須恵器	198	7.8	5	9.1	25	7.7	7	24.8	0	0	0	0
緑釉陶器	8	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瓦博類	75	3.0	11	20.0	11	3.4	1	3.4	0	0	0	0
木製品	40	1.6	5	9.1	2	0.6	13	40.0	1	0.2	0	0
石製品	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3
金属製品	2	0.1	0	0	0	0	1	3.4	0	0	0	0
その他	16	0.6	0	0	0	0	0	0	1	0.2	0	0
不明	9	0.4	2	3.6	0	0	0	0	3	0.5	0	0
計	2484	100	55	100	325	100	29	100	590	100	338	100
器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%
椀	230	9.2	18	32.7	60	18.5	2	6.9	1	0.2	0	0
皿	375	15.1	4	7.3	91	18.0	3	10.3	0	0	0	0
蓋	24	1.0	0	0	5	1.5	0	0	0	0	0	0
高杯	77	3.1	0	0	5	1.5	1	3.4	11	1.9	9	2.7
壺	344	13.9	0	0	9	2.8	1	3.4	139	23.6	90	26.6
鉢	26	1.0	1	1.8	0	0	6	20.7	18	3.1	0	0
平瓶	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
器台	4	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
製塩土器	99	3.6	3	5.5	0	0	0	0	0	0	0	0
甕	967	38.9	7	12.7	73	22.5	1	3.4	378	64.1	228	67.5
火舎	3	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
羽蓋	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
甕	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石匕	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3
土馬	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瓦	75	3.0	11	20.0	11	3.4	1	3.4	0	0	0	0
木製品	40	1.6	5	9.1	2	0.6	13	40.0	1	0.2	0	0
木銭	1	0.1	0	0	0	0	1	3.4	0	0	0	0
その他	19	0.7	1	1.8	0	0	0	0	1	0.2	1	0.3
不明	193	7.4	5	9.1	69	21.2	0	0	41	6.9	9	2.7
計	2484	100	55	100	325	100	29	100	590	100	338	100

第4章 ま と め

長岡京期の遺構のうち、S D27、S D36は、検出層位、出土遺物、溝の位置、方位などから、東三坊大路の東側溝と西側溝であろう。両側溝の心心での距離は、約25mを測る。^(注17) 両側溝を同時に検出した例としては、昭和55年度二条四坊の調査での二条大路南北両側溝検出が挙げられる。これも両側溝間心心での距離は約25mを測る。東三坊大路東側溝に限れば、昭和55年度五条三坊の調査、^(注18) D区S D02として既に検出されており、本調査S D27と同一線上に位置している。また、出土している遺物の年代は長岡京の時代に属するものであり、年代的にも長岡京の東三坊大路跡と推定することができる。

2区東側の櫓(S A25)は建物(S B33)と東側溝(S D27)を画する機能を持つものであるが、ただ、建物との距離が1.2mと近接していることは、建物が東西棟である可能性も考慮すべきであろうか。

1区中央に検出した櫓列は、方形のやや大きい掘形を持つS A50が、切り合いから考えて最古であり、西側列の櫓列ほど新しくなることが指摘できる。しかし、短期間に4回に及ぶ建て替えを行なったと考えることは不自然で、これをすべて櫓とすることには疑問が残る。

これらの長岡京期の遺構の上面を覆う第3層下層は、長岡京期の遺物をかなりの量で含んでおり、長岡京鹿絶時期の整地層であろう。遺物に年代幅がないことから、鹿絶後まもなく整地を受け、田圃化が計られたことが急であったことを推測させる。

古墳時代溝(S D64)は、昭和55年度五条三坊の調査の13区S K06の西北の延長上であり、同一の溝であろうが、ただ、最下層と考えられる地積層から弥生土器の出土が極めて微量であることは、前記S K06との推積の相違が認められる。^(注19)

その他、特筆すべきは縄文時代の石ヒがS D64下層で出土したことであろう。溝(S D64)の肩口の海拔高は10.50mを測る。石ヒ自体は上流からの流れ推積であることを差し引いても、かなりの低位置からの出土と言える。縄文時代の遺物を低位置から出土した例としては、昭和55年度大藪遺跡の調査があり、^(注20) 海拔15m前後で、後期後半、宮滝式と考えられる土器片が出土している。今回出土した石ヒは、これらと共に、桂川右岸地域における縄文遺跡の立地を再考する貴重な一資料となろう。

表3 出土土器遺構別一覧表

(単位: cm)

土器 番号	出土遺構、層位	器種	器形	法 量			備 考
				口径	器高	その他	
1	SD 64下層	土師器	甕	13.5	19.5- 21.0	腹径18.5	体部内面はケズる。肩部外面はナデ。腹部以下はハケによる調整。完形。
2	"	"	"	"	"	18.2	体部内面はケズる。体部外面はタナキによる調整。色調は茶褐色で雲母を多く含む。
3	"	"	"	"	"	16.7	底径 4.1 体部内外面をハケで調整する。平底。
4	"	"	壺	10.8	15.0	腹径15.7 肩径 4.7	頸部内面はハケで調整。中央が凹む平底を持つ。底部内面をハケ調整。完形。
5	"	"	"	7.9	8.9	腹径 3.2 肩径 3.2	体部外面を粗くミグク。底部は平底状になる。完形。
6	"	"	高杯	"	"	底径20.0	肩部外面をミグク。全体は淡赤色を呈する。遺しは三方。
7	"	"	器台	10.2	"	底径10.8	体部内面は細かい割懸痕あり。杯部外面下半はケズる。全体は淡赤色を呈する。
8	SD 64中層	"	甕	13.2	15.0- 16.0	腹径14.0	体部内面をハケで調整する。地成は極めて良好。
9	"	"	"	"	"	12.3	体部内面をケズる。体部外面はハケ調整。
10	"	"	"	"	"	14.5	体部内面をケズる。体部外面はハケ調整。
11	"	"	壺	10.8	11.4	腹径12.2	体部外面はハケ調整。底部の割懸痕。完形。
12	"	"	高杯	19.6	13.5	底径12.5	杯部内外面を放射状にミグク。
13	SD 27	"	皿A	20.3	2.3	"	体部底部外面をケズる。体部、底部外面に煤付着。
14	SK 28	"	"	"	"	17.6	体部内外面をナデる。体部内外面に煤付着。
15	"	"	"	"	"	22.2	2.3 体部下半と底部外面をケズる。体部、底部に煤付着。
16	"	"	鉢	15.5	"	"	消化した肥手をつける。外面に煤が付着する。
17	"	須恵器	壺	16.0	1.5 以上	"	"
18	"	"	皿	13.3	1.9	"	体部外面に煤付着。
19	"	"	壺	"	"	底径11.8	高台は貼り付け。
20	SD 29	土師器	碗	12.9	3.4	"	体部、底部外面をケズる。
21	SD 36	須恵器	鉢	22.0	5.6	"	"
22	SP 39	土師器	碗	14.7	4.0	"	体部、底部外面をケズる。
23	第3層	"	皿	18.3	3.0	"	"
24	"	"	甕	25.0	"	"	肩部内外面をハケによる調整。
25	"	"	"	14.5	"	"	体部外面はハケによる調整。口縁部内面は粗い襷方向のハケ調整。
26	"	須恵器	壺	14.5	2.3	"	肥手は貼り付け。
27	"	"	"	13.5	1.8	"	"
28	"	"	"	12.9	2.8	"	割懸や中厚い。
29	"	"	杯	12.0	4.3	底径 7.7	高台裏付をケズる。
30	"	"	"	12.7	4.5	底径 8.1	高台裏付と外面体部下層をケズる。
31	"	"	"	15.1	"	"	"
32	"	須恵器	壺	6.7	"	"	"
33	"	緑釉陶器	火舎	19.8	"	"	淡黄灰色の釉。

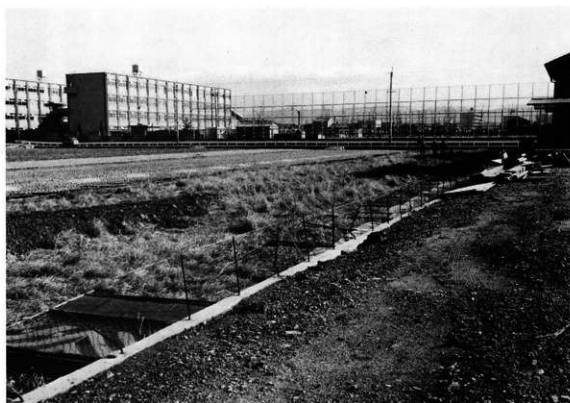
注

- (注1) 本書表1を参照
- (注2) 「日本専売公社工場用地内埋蔵文化財発掘調査概報」鳥羽屋宮跡調査研究所、昭和52年
- (注3) 「長岡京跡」京都市計画道路1等大路第3類第46号外環状線整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」財団法人京都市埋蔵文化財研究所 昭和55年 に報告されたC区SK06の北西に本調査区が位置する。
- (注4) いわゆる「確認調査」とされ、調査未済の手續きがとられた。
- (注5) 前掲(注3)
- (注6) いづれも小破片のため図化せず。
- (注7) 前掲(注6)
- (注8) 前掲(注6)
- (注9) 前掲(注6)
- (注10) 前掲(注6)
- (注11) 肩部にクシによる平行線文と波状文を持つ。
- (注12) 前掲(注6)
- (注13) S D63出土高杯と同タイプ。
- (注14) 高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」京都府教育委員会・埋蔵文化財発掘調査概報1979」昭和54年 で近似した石ヒが出土している。
- (注15) 前掲(注6)
- (注16) 本調査では、口径20cm前後の皿の底部外面に煤が付着し、内面に有機物の付着する例が極めて多い。
- (注17) 本書表1の調査番号15を参照。
- (注18) 前掲(注3)
- (注19) 前掲(注3)
- (注20) 「大堰遺跡発掘調査概要」財団法人京都市埋蔵文化財研究所 昭和55年。

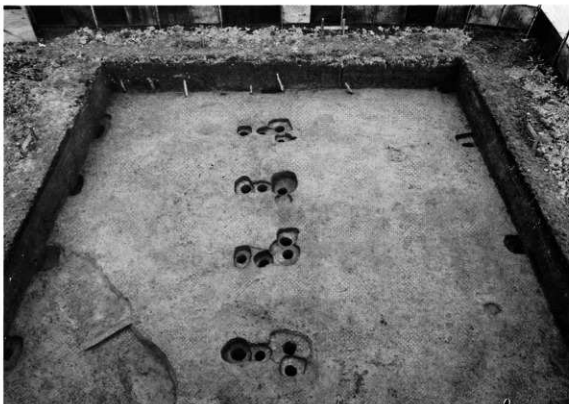
圖 版



1. 調査前全景(東から)



2. 調査前全景(西南から)



1. 1区長岡京期全景(南から)



2. SX64(南から)



2 区长岡京期全景(東から)



1. S D27・S A25・S B33(南から)



2. S D63(南から)



1. S D40内杭検出状況(南から)



2. S D67・S D67B(北から)



1. S D 27堆積状況(北から)



2. S D 63堆積状況(北から)



1. S D36堆積状況(北から)



2. 銭貨出土状況(西から)



3. S D64遺物出土状況(東から)



古墳時代出土遺物



3



11

1. 吉墳時代出土遺物



22



14



23



16



13



24

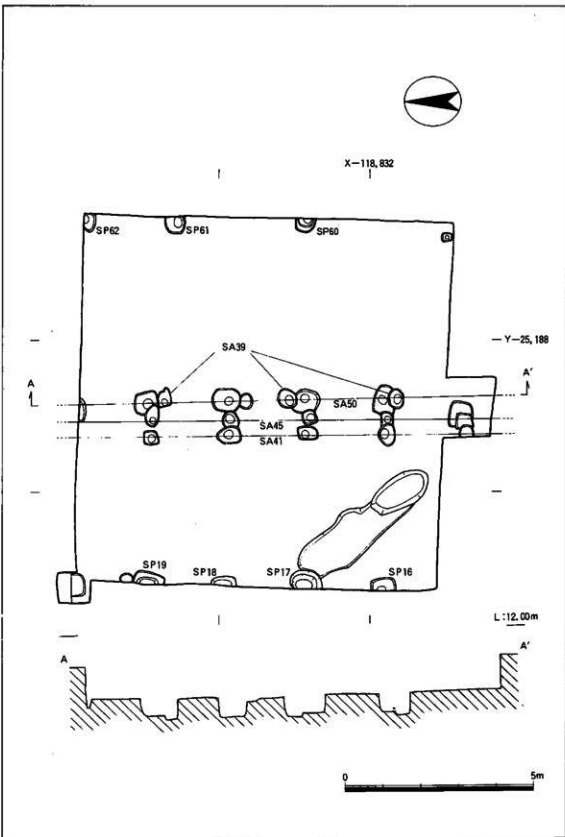


15

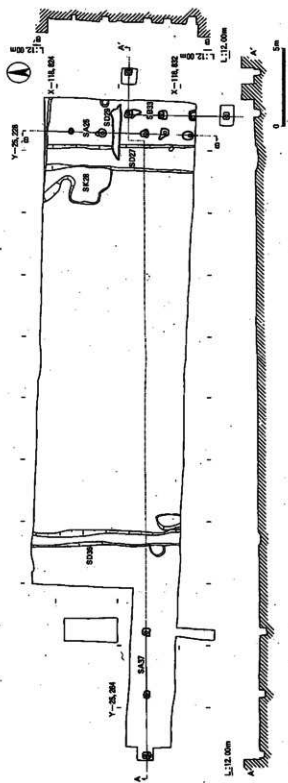
2. 長岡京期出土遺物



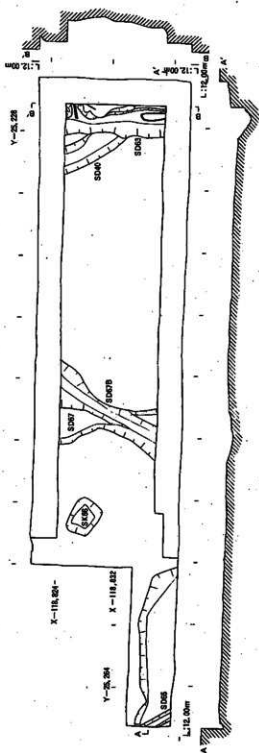
長岡京期及び磯文時代出土遺物



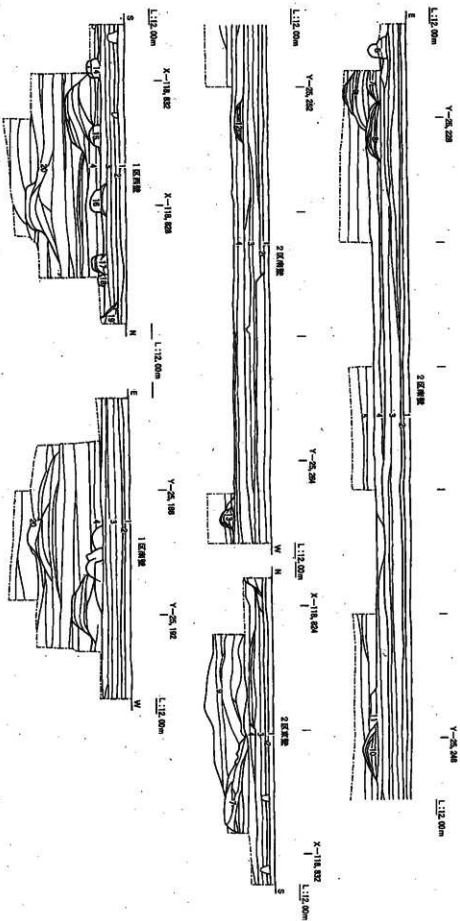
长岡京期1区実測図



1. 西周晚期 2 区平面图



2. 西周晚期 2 区平面图



- 1 灰岩シタリ(第1期)
- 2 灰岩V-7層シタリ(第2期)
- 3 砂岩V-7層(第3期)
- 4 灰岩シタリ(第4期)
- 5 砂岩(第5期)
- 6 S333
- 7 S246
- 8 S227
- 9 S243
- 10 S207B
- 11 S247
- 12 S236
- 13 S205
- 14 S214
- 15 S217
- 16 S214
- 17 S219
- 18 S220
- 19 S21
- 20 S244



長岡京跡発掘調査概報

昭和57年度

発行日 昭和58年3月31日

発行 京都市文化観光局
〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会議館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
〒602 京都市上京区今出川通大宮東入ル元伊佐町265-1
TEL(075)415-0521

印刷 南 真 陽 社
〒600 京都市下京区油小路綾小路下ル風早町566
TEL(075)351-6034